

続・ 珈琲の思い出四

が、その日は全く仕事を手につかなかった。気がつくやうに、胸ポケットの優子が載っている新聞記事のことが気になり、まわりの社員みなに見せてまわりたいぐらいだった。

昼休み、売店で買った弁当をかきこみながら、こっそり新聞記事を開いた。周囲を見回してみても、そんな僕のことを気にする人は誰もいなかった。深呼吸を一つしてから、思う存分優子の記事を堪能した。

そうしているうちに、優子の優しい澄んだ声やあのとろけるような笑顔が思い出され、いてもたってもいられなくなってきた。

そして、唐突に、この新聞記事のことを優子に直接話しに行こう、今日、会社帰りに優子の本屋へ行ってみよう、という思いが湧きあがってきた。

とは言え、優子の仕事が普段何時ぐらいに終わるのか、はたまたおはなし会以外の日に彼女がどのような本屋で仕事をしているのか全くわからなかった。とにかく、僕の会社から優子の本屋まで徒歩10分強、定時の18時ちょうどに退社して、駅前まで急げばなんとか間に合うかも知れない。そう計算してからは話が早かった。僕は俄然やる気が出てきて、普段の3倍のスピードで仕事をこなし、翌日の分の準備まで済ませてしまった。目の前に人參をぶら下げた馬のごとく、きつと僕の目の前には、優子という存在がぶらさがっていたのだろう。